OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『危機』と『FTL』を結ぶ接点
Author(s)	山口, 弘多郎
Citation	メタフュシカ. 2018, 49, p. 71-84
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71245
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『危機』と『FTL』を結ぶ接点

山口弘多郎

はじめに[1]

エトムント・フッサールは『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』（以下、『危機』と略記）の第3部Aにおいて、〈生活世界から出発して超越論的現象学へ至る道〉を構想している。この現象学的還元の道は、生活世界という後期のフッサール現象学を代表する概念が用いられていることから、これまで、他のテキストや講義との関連性において、その還元の内容や可否、さらには、その形成史に関して様々に研究されてきた。特に関連性が強いテキストは、『純粋現象学と現象学的哲学のための諸構想』第1巻（以下、『イデーンⅠ』と略記）である。というのも、彼自身が『危機』と『イデーンⅠ』を比較しているからである。彼は、『イデーンⅠ』において提示した還元の道を「デカルト的な道」と呼び、そこには「大きな短所」があると自省した上で、それを克服する「新しい道」として、生活世界から出発する道を提示した。また、榊原哲也は、フッサールが1923／4年冬学期に行った講義『第一哲学』を取り上げ、そこで展開される還元の理論を踏まえながら、『危機』における「生活世界からの道」を詳細に分析した[2]。他にも、『自然と精神』や『現象学的心理学』といった講義との関連性が明らかにされている[3]。

それに対して、『危機』と『形式論理学と超越論的論理学』（以下、『FTL』と略記）の関連性が主題になることは少ない。確かに、『危機』の還元の道と『FTL』の還元の道は別々の道だとされている。オイゲン・フィンクは、晩年のフッサールが構想した還元の道を「形式論理学からの道」「デカルト的な思想の歩みの徹底化」「学問論的な主導モチーフ」「現象学的心理学から『超越論的問題設定』への転化」の4つに整理した[4]。『FTL』が「形式論理学からの道」に対応する

---

1 フッサール全集（Husserliana）からの引用は慣例に従い、本文中括弧内に巻数をローマ数字で、またページ数をアラビア数字で表記した。分冊になっている巻の場合は、巻数をⅢ／1のように表記した。また、本論文での引用文における強調は、すべて原文のものである。

2 榊原哲也、『フッサール現象学の生成　方法の成立と展開』、東京大学出版会、2009年、第3部第3章と第5章を参照。

3 Rudolf Bernet / Iso Kern / Eduard Marbach: Edmund Husserl. Darstellung seines Denkens. Felix Meiner Verlag, Hamburg, 1989. を参照。

4 オイゲン・フィンク著、新田義弘・小池稔訳『フッサールの現象学』、以文社、1982年、185頁。

のに対して、『危機』第 3 部 A は「学問論的な主導モチーフ」に当てはまる。しかしながら、『危機』も『FTL』も、当時の学問が抱えていた危機的状況を背景に書かれたテキストである。両テキストが問題背景を共有しているなら、それぞれの還元の道にも関連性があると考えるのが自然だろう。

本稿の目的は、この関連性を明らかにすることである。フッサールは、『危機』の還元の道に関して、『経験と判断』でも言及しており、その道を以下のように定式化している。

1 学問や学問的規定、そして、すべての意味沈殿を伴った前もって与えられる世界から根源的な生活世界への帰還
2 生活世界からこの世界自身が生じる主観的能作への帰還（EU, 49）

この定式からわかるように、生活世界から出発する道には、その前段階として生活世界へ帰還する道が存在する。榊原の表現の仕方に倣って、それぞれの道を「生活世界への道」と「生活世界からの道」と呼んで区別したい。本稿が明らかにしたいのは、この「生活世界への道」と「形式論理学からの道」の関連性である。どちらの道も学問を出発点としているので、関連性を見るのに適している。

この関連性は、1936 年にその一部が発表された『危機』から 1929 年に公刊された『FTL』へ遡及することで見えてくる。そこで、以下の順番で議論を進めたい。第 1 節では、フッサールが『危機』で提示した「自然科学の『公式』の意味の問題」から「生活世界への道」を考察する。第 2 節では、『危機』から『事物と空間』や『イデーンⅠ』といった中期フッサールのテキストへ遡り、そこで行われている物理学に関する記述を取り上げ、『危機』だけでは見えてこなかった「生活世界への道」の新しい側面を明らかにする。この新しい側面が『FTL』との接点を切り開くので、第 3 節では「形式論理学からの道」を概観した後、この 2 つの道を比較し、両者の関連性を明らかにする。

本稿の取り組みをフィンクの整理を用いて言い直せば、本稿は、「学問論的な主導モチーフ」に導かれた道と「形式論理学からの道」として、これまで異なる道とされてきた『危機』と『FTL』の還元の道が、実際には繋がっていたことを示そうとするものである。本稿では『危機』から『FTL』へ遡って両者を関連付けるが、これで両者が結び付けられれば、次は『FTL』から『危機』へ進むことも可能になる。それによって、『危機』の還元の道がどのように形成されたのか、その形成史を『FTL』との関係において研究する可能性も開かれるだろう。

1　生活世界への道

「生活世界への道」は、「学問や学問的規定」から出発して、生活世界へ帰還する道である。この「学問や学問的規定」とは、『危機』に即して言えば、その表題にある「ヨーロッパ諸学」のことを指す。『危機』第 1 部では、そのヨーロッパ諸学の危機が論じられ、第 2 部第 9 節では、その危機が自然科学による生活世界の忘却であると明らかにされる。このことから見えてくるよ

うに、諸学問の危機が生活世界への帰還を動機付けている。つまり、当時の学問が抱えていた危機的問題を解決するために、生活世界へ帰還することが求められたのである。そこで、本節では、この危機的問題の考察を通して、「生活世界への道」がどのような道であるかを明らかにしたい。

その問題の1つが、フッサールが『危機』第9節の小節f）で立てた「自然科学の『公式（Formel）』の意味の問題」である。従来、『危機』第9節と言えば、測定術から幾何学が成立する過程の記述が取り上げられてきた。ただ、この記述は学問の危機的状況そのものを表しているというよりもむしろ、その危機克服の一環として行われていることであるため、学問の危機内容を把握する場合は、公式の問題を取り上げる方が適している。

この問題は、フッサールが「幾何学の算術化」と呼ぶ数学の事実史を背景にしている。その算術化とは、幾何学が代数的表記と思考法の影響を受けた結果生じた変化のことである。古代の幾何学は、ユークリッドの『原論』が最たる例だが、作図によって行われていた。しかし、近代の代数学の影響により、代数記号（x や y など）や計算記号（+、×、＝など）を用いて幾何学は行われるようになる。例えばピタゴラスの定理の場合、その定理内容は、作図ではなく、「$x^2+y^2=z^2$」という公式によって表される。この算術化の結果、フッサールが指摘する公式の意味の問題が生じる。

> この幾何学の算術化が、おのずから、ある仕方で幾何学の意味の空洞化（Entleerung）に行きつく。（中略）代数的計算においては、幾何学的意味はおのずから斥けられ、完全に抜け落ちる。人は計算し、最後になってはじめて、数が大きさを意味するはずであったことを思い出す（VI, 44）。

この引用文から、公式の意味の問題とは、幾何学の公式が代数的に算術化されることによって、その式から幾何学的意味が空洞化することであるとわかる。引き続き、ピタゴラスの定理を例にとるなら、この定理が「$x^2+y^2=z^2$」という代数式として表されることにより、「x」と「y」から「三角形の直角に交わる二辺」、「z」から「三角形の斜辺」という幾何学的意味が抜け落ちるということになる。というのも、代数的計算はその計算のルールがわかっていればできるもので、式の各項目が何を意味しているかを意識する必要がないからである。

この意味の空洞化は、算術化された幾何学に留まらない。算術化される以前の幾何学もすでに、その意味が空洞化していたとフッサールは言っている（VI, 49）。また、自然科学に関しても、代数学的な思考と技術が影響すれば、その意味が空洞化されてしまうと述べている（VI, 48）。つまり、公式の問題は自然科学全体にわたる問題なのである。

この問題はどれほどの重要性を持つのか。これは、フッサールの自然科学観を考慮するとわかる。彼が『危機』において「自然科学」という語を使う際、それは主に物理学のことを指している。このことは、『危機』に登場する科学者の名前がガリレイやニュートン、アインシュタイン、プランクといった物理学者の名前であることからわかる。次の引用文は、フッサールが物理学をどう捉えているかを示している。

> この普遍的な公式が、あらゆる自然科学的研究において、関心の中心に置かれる。古い物理学でも新しい物理学でも、すべての発見は、いわば自然に属する公式世界の発見である（VI, 48）。

『危機』の一部が公刊された 1936 年は、古典物理学からアインシュタインらによる新しい物理学への変革期にあたり、この 2 つの物理学の本質的な違いについては、パラダイム論をはじめとする様々な議論があるが、フッサールはどちらの物理学であっても公式の発見が主要な仕事であると捉えている。したがって、自然科学の公式の意味の問題とは、物理学の中心に位置付けられる根本的な問題であると言えるだろう。

では、公式の意味の問題はどこが問題なのか。言い換えれば、公式の意味の空洞化は何が問題なのか。このことを考察するためには、まず、この問題を捉える視点と枠組みを理解する必要がある。その視点とは実践的視点である。フッサールは『危機』において、学問を学者の実践として捉えている。また、物理学の公式も、その公式内容やその妥当性を問題視しているのではなく、その公式を構築する実践（公式化と言えるだろう）の成果として扱っているのである。『危機』第 9 節の表題にある「数学化」という術語が、この視点を端的に表している。数学化とは、文字通り、非数学的なものから数学的なものを構築する実践のことである。この数学化の視点によって、数学的なものを〈何らかの非数学的なものを素材に構築されたもの〉として捉えることが可能になる。

> いまや直観的な世界の方法的な客観化という役割を果たしている世界の間接的な数学化が、一般的な数式（Zahlformeln）を生み出す。（中略）明らかに、公式は一般的で因果な連関、つまり「自然法則」を表現している（VI, 40）。

この引用文からもわかるように、公式は、世界の間接的な数学化という実践から生み出されたものなのである。この実践的視点の意義は、数学には、それに先立つ前段階があることを示すところにある。つまり、数学的なものを非数学的な素材から構築されたものとすることで、その素材を扱う段階があることを明らかにしたのである。フッサールは、その段階を「前学問的（vorwissenschaftlich）」という形容詞を使って表している[5]。この「前学問的」段階と学問的段階の区別が 1 つの枠組みとなって、『危機』の議論を支えている。例えば、測定術から幾何学が成立する過程は、この枠組みの内で記述された。測定術は「前幾何学的作業」なのである（VI, 49）。実践的視点から見えてくるこの前学問的段階は重要である。というのも、この段階に生活世界が位置付けられるからである。フッサールは、生活世界に存在する対象やそこでの生活に対して「前学問的」という形容詞を用いている。

---

[5] 『危機』では、「学問外的（ausserwissenschaftlich）」という「前学問的」と似た形容詞が使われることがある。後者が、測定術など、理論的学問の成立に通じるような実践に用いられるのに対して、前者は、食事など、学問とは関係ない実践に用いられる。

公式の問題を捉える視点と枠組みを確認したところで、次に、公式の意味の空洞化がなぜ生じるのかを確認しよう。その原因は、公式という数学的なものが持つ性質にある。フッサールは、公式をはじめとする自然科学的諸理論をまとめて「理念の衣（Ideenkleid）」と呼んでいるのだが、この衣には次のような性質がある。

> この理念の衣は、1つの方法を真の存在だと見なす（VI, 52）。

この「真の存在だと見なす」ことは、ガリレイの有名な発言に端的に表されているように[6]、世界の真の在り方を数学的であると捉えることである。この性質が、生活世界の忘却という『危機』研究において幾度となく取り上げられてきた、よく知られた事態を招く。

> 幾何学的な数学化や自然科学的な数学化において、私たちは、生活世界――私たちの具体的な世界生活の中でつねに現実的なものとして与えられる世界――に、可能な経験の開かれた無限性の中で、いわゆる客観的学問の真理というぴったり合った理念の衣を着せるのである（VI, 51）。

理念の衣が生活世界に重ね合わされることによって、生活世界が覆い隠され、数学的な世界が世界の真の在り方であると勘違いされる。これが生活世界の忘却である。フッサールにとって、この事態は看過できない。世界の真の在り方は数学的ではないからである。公式をはじめとする理念の衣は、数学化という学問的実践を通して構築される。言い換えれば、学問にはそれに先立つ前学問的段階である生活世界が存在し、学問はそこから生じてくるのである。

確認すべきことを確認したところで、公式の意味の空洞化の何が問題なのかを考えたい。先程、意味の空洞化は、決して算術化された幾何学に留まらず、古代の幾何学でも物理学でも生じることを確認した。フッサールは、幾何学を物理学の意味基底と理解しており（VI, 21）、その幾何学は測定術という前幾何学的作業から形成されると考え、その前学問的段階に生活世界を位置付けていた。各段階で生じる意味の空洞化をまとめてしまえば、自然科学の公式から意味が空洞化することとは、そこから生活世界的な意味が抜け落ちてしまうことだと言えるだろう。つまり、公式の意味の空洞化が抱える問題点は、公式が、その出生地（フッサールの言葉で言えば「起源（Ursprung）」）である生活世界を忘却してしまったところにあると考えられるのである。

では、なぜこの空洞化は問題なのか。それは、フッサールが考える学問本来のあり方に反するからである。彼は次のように述べている。

---

[6] 「哲学は、眼のまえにたえず開かれているこの最も巨大な書〔すなわち、宇宙〕のなかに、書かれているのです。しかし、まずその言語を理解し、そこに書かれている文字を解読することを学ばないかぎり、理解できません。その書は数学の言語で書かれており、その文字は三角形、円その他の幾何学図形であって、これらの手段がなければ、人間の力では、そのことばを理解できないのです」ガリレイ，ガリレオ著、山田慶兒・谷泰訳『偽金鑑識官』、中央公論社、2009年、57頁。

> 前学問的な生活とその周囲世界から生じた新しい自然科学が、それと不可分な幾何学とともに、最初から奉仕すべきだった究極的な目的、つまり、この生活そのもののうちにあってその生活世界に結びついているに違いない目的にまで、その省察が徹底的に遂行されることはなかった。自然研究者も含めて、この世界に生きている人間は、そのすべての実践的・理論的問いを、ただこの世界にだけ向けられる。理論的にも、その無限に開かれた未知の地平を持つこの世界にのみ関わるのである（VI, 50）。

引用文の前半で、自然科学が自身の目的に対する省察を怠っていると、彼は批判している。その目的とは、生活世界に結びついているものである。ここまでの考察で、生活世界が学問の出生地であることが明らかになったが、学問と生活世界の関係はそれだけではなく、両者は目的論的に結びつけられているのである。その目的の個別的具体的内容に関しては詳述されていないが、引用文後半がその目的の一端である。自然研究者（自然科学者）は、その理論的問いを、「この世界」つまり生活世界に向ける。言い換えれば、その理論的問いは生活世界についての問いである。そうであるならば、この時の目的はこの世界に関して普遍的な理論を構築するところにあると考えられるだろう。こうした生活世界へ向けられた問いは、その答えも生活世界から得なければならない。生活世界が学問の出生地であることと、学問が生活世界へ目的論的に結びつけられていることは相関的である。

学問と生活世界の目的論的関係を理解し、生活世界に結びつけられた「究極の目的」に奉仕することが、フッサールにとっての学問本来のあり方であるなら、生活世界を忘却してしまっている自然科学の公式の意味の空洞化は、まさに解決すべき問題であるだろう。その目的のために公式が発見されたにもかかわらず、その当の公式から〈何のための公式だったのか〉という生活世界的意味が抜け落ちてしまっているからである。

本節では、「生活世界への道」がどのような道なのかを明らかにするために、その道の出発点である学問が抱える危機的問題（公式の意味の問題）を確認した。学問とは本来、生活世界に結びつけられた目的を持っており、その目的のために、公式といった諸理論は構築されるのだが、その理念性ゆえにその目的が忘れられ、公式が何のためのものだったのかという生活世界的意味が空洞化されてしまう。危機的問題がこうした内容であるなら、フッサールが、学問から生活世界へ立ち返ろうとした動機も理解できるだろう。それは、学問がもつ生活世界的目的を思い出し、公式から抜け落ちた意味を回復させるためである。

２　フッサールの物理学記述

前節では、自然科学の公式の意味の問題から「生活世界への道」がどのようなものなのかを確認した。それは、自然科学の出生地である生活世界へ帰ることで、その公式の意味を回復させるものであった。しかしながら、生活世界へ帰る目的や動機は明らかになっても、その帰る先である生活世界がどのような世界なのかは、まだ不明確である。これがわからなければ、「生活世界への道」の詳細も不明のままである。そこで、本節では『危機』以前のテキストへ遡り、そこで

の物理学記述を確認することで、「生活世界への道」の内実をより明確にしたい。

最初に取り上げるのは、1907 年に行われた講義『事物と空間』である。これは、この前に行われた講義「現象学および理性批判の主要部への導入」（現在は、『現象学の理念』というタイトルで、フッサール全集第 2 巻として公刊されている）の続編であり、『現象学の理念』が現象学的方法の一般的考察を行っているのに対して、『事物と空間』では事物知覚の事例に即した具体的分析が展開されている。

この講義の導入で、フッサールは「自然的経験の世界」と「学問的理論の世界」を対比している。前者は、私たちが眼前に見出している世界であり、事物や他者を直接経験している世界である。私たちは、自然的経験（直接的知覚や想起）を通して、この世界の事物の性質や時間空間のあり方などを素朴に理解している。それに対して、後者は学問的研究を通して構築された世界である。各学問はそれぞれの観点から事物を扱う。例えば、物理学は物理的性状という観点から事物を理解する。両方の世界理解の仕方は大きく異なる。例えば「机」の場合、自然的経験においては、〈木で作られている〉といった仕方で理解しているが、学問的理論の場合、〈机は原子で作られている〉といった理解の仕方をするだろう。こうした理解の違いに対して、フッサールは一度譲歩する。

> 学問の世界理解は、前学問的経験の世界理解からかなりかけ離れているかもしれない（XVI, 6）。

この譲歩の発言で注目したいのは、フッサールが自然的経験を「前学問的経験」と言い直している点である。『事物と空間』の講義において、「学問的」「前学問的」という区別がすでに存在しているのである。彼は、この譲歩の後、次のように続けている。

> しかしながら、そのときも学問に諸事物を与えているのは、あくまでも端的な経験、つまり直接的知覚や想起などであって、学問はただ、この与えられた事物を、日常の思考様式から離れて理論的に規定しているにすぎない（XVI, 6）。

この引用文が伝えていることは、たとえ学問的理論による世界理解が自然的経験を通した世界理解からかけ離れているとしても、学問的理論は自然的経験という前学問的経験の上に構築されているということである。学問的理論の対象は、前学問的経験において与えられる事物なのである。このことは、具体的には、次のように表される。

> プラチナのこの断片は、ほんとうはしかじかの性状の原子複合体であり、しかじかの運動の状態をもっている、と自然研究者は言うかもしれない。だが、そのように語りながら彼が規定しているこの事物は、いつもかならず、彼が見たり、手に持ったり、天秤のうえに置くなどするものである（XVI, 6-7）。

この具体例からわかることは、前学問的経験において与えられる事物、つまり、自然研究者が日常の思考様式から離れて理論的に規定している対象は、彼が研究活動において直接経験する個別的事物であるということである。それは、他の同じ種類のものではなく、研究者が見たり触れたりしている、まさにこの事物なのである。

以上のことから、『事物と空間』における物理学の記述をまとめよう。学問的理論による世界理解と前学問的経験を通した世界理解が大きく異なるので、一見すると学問的理論と前学問的経験は全く異なるものであるかのように見えるが、実際には、学問は前学問的経験の上に成り立っている。具体的には、自然研究者は、彼が直接知覚している個別的事物を、日常の思考様式からかけ離れて理論的に規定しているのである。

次に、1913 年に公刊された『イデーンⅠ』における物理学の記述を取り上げたい。フッサールは、自然的態度にある「素朴な人間」と「学問的な人間」を対比しながら、第一性質と第二性質という物理学の古典的区別を取り上げつつ、一般的な物理学観を紹介している。その 1 つが次のようなものである。

> 知覚される諸事物の本質内容全体が（中略）「単なる現出」なのであり、一方、「真なる事物」とは、物理学的な学問における事物のことである（Ⅲ／1, 82）。

この物理学観は、前節で紹介したガリレイの考え方に通じるものである。私たちが日常経験において知覚する事物は、物理学的な事物（原子、イオン、エネルギーなど）という「真なる事物」の「単なる現出」に過ぎない。物理学は、そうした「単なる現出」を超えて、「真なる事物」を規定している。こうした考え方は、世界の真の在り方を捉え損なっているという点で、フッサールと相容れない。これに対して、彼は物理学を次のように記述する。

> 物理学者が観察し、実験をなし、絶えず見つめ、手に取り、天秤に乗せ、溶鉱炉の中にいれる事物、他ならぬこの事物こそが、重さ、温度、電気的抵抗などなどといった物理学的述語の主語になるのである（Ⅲ／1, 113）。

ここでは、主語述語という論理学的用語が記述に用いられている。しかし、その内容は『事物と空間』の記述と本質的には変わらない。ここでも、物理学的規定の対象の個別性が強調されている。物理学者がその学問的営為において直接経験している個別的事物こそが、物理学的概念による述語的規定の基体なのである。

さらに、1925 年の夏学期に行われた講義『現象学的心理学』を取り上げる。ここで、フッサールは現象学的心理学を精神科学からも自然科学からも際立たせるために、それらが主題とする自然や精神の概念を問おうとする。そのとき、「前学問的経験世界」へ立ち帰る必要性を説き、その世界から学問的活動を次のように記述している。

> あらゆる思考と、そのほか精神活動から生まれる理念的形成物すべての究極の基体は、経験世界にある。私たちがこの世界ないしそこから取り出された対象について陳述し、その陳述を論証や理論によって基礎づけるとき、私たちはそれによって、はじめ前理論的に端的に経験されたもの（あるいは、経験可能なもの）に対して、ある方法的な形式をもった述語的規定を生み出しており、これは理論的形成物として、実在的ではないものの領土に存在する（IX, 58）。

この引用文の内容に入る前に、これを理解するために、「理念的（ideal）」と「実在的（real）」の区別について確認したい。フッサールは、この 2 つを時間性によって区別する。理念的対象には「超時間性（Überzeitlichkeit）」という性質があり、これは特定の時間空間位置を持たないことを意味している。例えば数学的対象や物理学的対象などが理念的対象に当たる。これに対して、実在的対象は特定の時間空間位置を持つもので、直接経験される個別的事物がそうである。したがって、引用文中に登場する「理念的形成物」のうちには、物理学的対象も含まれる。

この引用文では、学問的活動を通して行われる理論形成が述語的規定と表現され、その規定の基体が私たちの経験世界から取り出された対象であると明記され、さらに、その世界経験に対して「前理論的（vortheoretisch）」という形容詞が用いられている。この形容詞は、その内容から考えて、「前学問的」と同義であると考えていいだろう。したがって、『現象学的心理学』でも、学問的活動が「前学問的」「学問的」という枠組みの内で記述され、前学問的経験に与えられる個別的対象が学問的理論の基体であると捉えられているのである。

ここまで、『事物と空間』『イデーンⅠ』『現象学的心理学』における物理学の記述を見てきた。それらは、単にその内容が似ているだけではなく、「前学問的」と「学問的」の区別など、その記述背景も共有していた。ここで、改めて『危機』に戻りたい。『危機』と枠組みを共有する記述を踏まえれば、生活世界がどのような世界であるかが見えてくるだろう。

フッサールは、算術化される以前の幾何学においても、その意味が空洞化していると指摘していた。その上で、測定術という前幾何学的作業から幾何学が成立する過程を記述しているので、この記述は、彼なりの幾何学から生活世界への帰還の試みであるとも言える。その記述では、測定術が行われる直観的な世界において経験する事物の個別性が強調される。

> その物体は、幾何学的で理念的な立体ではなく、私たちがまさに現実に経験し、現実の経験内容である内容を持った**この**物体である（VI, 22）。

つまり、幾何学の「三角形」や「四角形」といった幾何学的概念を、測定術が扱う個別的事物の形態へ還元するのである。

また、フッサールは『危機』第 33 節において、学問的実践を遂行する際もそれを継続する際も、直観的な「生活周囲世界（Lebensumwelt）」が前提されていると述べた上で、物理学者を例にとって、その世界を説明している。

> その周囲世界とは、たとえば物理学者にとっては、彼がその中で自分の計測器をみたり、拍節器の音を聞いたり、量を見ながら測定などしている周囲世界であり、しかもその中で彼自身も様々に行動したり、理論的な思考をしたりしながら、そこにふくまれていることを知っているような周囲世界である（VI, 123-124）。

『事物と空間』や『イデーンⅠ』などで、物理学者が理論的規定の基体である個別的事物を経験する場が実験や観察の場であったように、『危機』においても、生活世界が物理学者の学問環境として記述されている。

以上の 2 点をふまえると、「学問や学問的規定」から出発して、生活世界へ帰還する道は、次のようにまとめられるのではないだろうか。『危機』の場合、出発点である学問は自然科学（主に物理学）であり、学問的規定はその諸理論、具体的には公式である。その公式は、物理学者が彼の生活世界において、実験や観察などで直接経験する個別的事物を基体とした述語的規定である。ところが、公式の理念性ゆえに、その基体である個別的事物が抜け落ち、その公式が何についての述語的規定であるかが忘れられてしまう。そこで、その意味を回復させるために、その公式の基体である個別的事物へ立ち帰る。このように、「生活世界への道」は、公式のいわば素材である生活世界内の個別的事物への帰還として特徴づけられるのである。

３ 『危機』と『FTL』を結ぶ接点

前節までで、『危機』の「生活世界への道」が、生活世界内の個別的事物への帰還という側面を有していることが判明した。この考察によって、『危機』と『FTL』の繋がりが見えてくる。なぜなら、『FTL』の「形式論理学からの道」は、その道中で、真理をそれが関係付けられている個物へと還元する「個物への還元」が行われるからである。そこで、本節ではこの「個物への還元」を概観した後、「生活世界への道」と「個物への還元」の関連性を、それぞれの出発点である物理学と論理学の比較を通して明らかにする。

「はじめに」で少し言及したが、この『FTL』の背景には、当時の学問が抱えていた「悲劇的状況（Tragik）」がある。それは、各専門の学問が巨大に成長した結果、その諸学の成果を完全に利用することができなくなってしまっているという状況で、これは、単に諸学の成果を集めることができなくなったということではなく、学問が「原理的な基礎付け（Verwurzelung）」を欠き、その基礎に基づいて諸学を統一できていないことを意味している（XVII, 7）。その結果、諸学問はその絶対的な意義に対する信頼を失い、当時の人々は「真に満足する生、つまり、実践理性による個人の生と社会の生を可能にする」ための術を見失ってしまっていた（XVII, 9）。こうした状況に対して、フッサールは「徹底的な詳察」を行おうとする。ただ、この詳察には「他のいくつかの道」が可能で、彼は『FTL』で、「真の学問の理念をその規範である論理学へ歴史的に回帰させることでたどりつく道」を選んだのである（XVII, 11-12）。

フッサールが還元の出発点に形式論理学を選んだ理由を確認したところで、その論理学が扱う判断形式の基本的な性質について見ていきたい。フッサールは形式論理学を論じる際、その事実

的な成立史に簡単に言及していて、アリストテレスの分析論を歴史上最初の形式論理学とし、近代の代数学の登場と代数記号の利用によって、形式論理学が完全な形式性へ達したとまとめている（XVII, 53）。つまり、代数学の活用によって、判断を完全に形式化することが可能になったのである。例えば、「トマトは赤い」「赤いトマトは小さい」といった何らかの事象的な事柄を含む諸判断は、「S は P である」「SP は Q である」といった仕方で、その事柄を任意のあるもの一般に置き換えることで形式化される。さらに、論理学は完全な判断形式を獲得したことで、その形式から新しい形式を作り出すこともできるようになった。例えば、「S は P である」から「もし S が P であれば」「したがって S は P である」といったものが作れる。基礎的な形式論理学は、こうした判断形式を扱う。

フッサールは『FTL』の第 1 篇で、形式論理学の現象学的解明を行った後、第 2 篇で形式論理学から超越論的論理学へ進もうとするのだが、その際、「判断から判断の基体への回帰」を行わなければならないと述べている（XVII, 209）。その基体が個物である。

> なぜなら究極的な基体対象は各個物であり、これらについては形式的な真理において非常に多くのことが論述され、そして最終的にすべての真理が回帰的に個物と関係づけられるからである（XVII, 211）。

この個物という究極的な基体への回帰は、判断形式の複雑な組み合わせから単純な要素へという仕方で行われる。例えば「a かつ b である S は P である」といった複雑な組み合わせは、「S は a である」「S は b である」「S は P である」といった判断へ還元可能で、さらには、何の統語的なつながりも含まない複数の要素的な核「S」や「P」にまで遡及することができる。そして、遡れないところまで遡った先にあるものが「究極的な基体」＝個物である。この判断と個物の遡及的関係は、『FTL』において、1 つのアプリオリにまで昇華されている。

> およそ考え得るかぎりの判断はどれも究極的には（明確にせよ不明確にせよ）個々の（最も広い意味での実在的な）対象と関係しているということ、そして、それによってどの判断も 1 つの実在的な宇宙、すなわち 1 つの「世界」に、あるいは、「すべての判断が妥当する」1 つの世界領野に関係している（XVII, 212）。

この引用文において、「個々の対象」という語に加えて「世界」という語が登場したが、この世界は「個物の世界」のことを意味している。このように、フッサールが判断と個物の関係を踏まえた上で、個物へと回帰しようとするのは、この個物の直接経験が持つ明証性から判断の明証性を基礎付けようとしているからである。彼は「最初の各真理と明証性は、個物のそれらでなければならない」と述べており（XVII, 213）、個物の直接経験が持つ明証性を最も根源的な明証性と考えているのである。

ここまで、「個物への還元」の内容を概観してきた。これによって、『危機』の「生活世界への

道」も『FTL』の「形式論理学からの道」も、公式や判断の究極的な基体である個物へ帰還しようとする点で、同じ発想に基づいていることがわかる。ここから、この 2 つの道の根底にある発想が同じになった要因を考察することで、それが必然的なことであったと示したい。

その最大の要因は、それぞれの道が出発点とする物理学と形式論理学に共通する性質にあると考えられる。前節で確認したように、公式などの数学的対象は理念的対象である。同様に、判断形式という論理学的形成物も理念性を有している。また、数学的対象を作り出す数学化も判断形式を形成する形式化も、理念的対象を作り出す働きとして同じである。フッサールは、こうした働きを総称して「理念化（idealisierung）」と呼んでいる。

数学化も形式化も、近代の代数学の影響を受けているという点で、事実史において背景を共有しているが、それだけではなく、現象学的概念の形成史においても、同じ起源を持っている。デルモート・モランが言及しているように[7]、この「理念化」という概念は、フッサールが『イデーンⅠ』で論じた「形式化（Formalisierung）」と「類的普遍化（Generalisierung）」の区別から理解することができる。彼は、「本質」を直観可能な新しい対象として捉え、その一般化の仕方をその 2 つに分けた。前者が、事象内容を含むものを形式的なものへ変える作用であるのに対して、後者は、事象内容を含むものをその類種関係に沿って普遍化する作用である。前者の形式化が「理念化」に通じている。この本質の 2 種類の一般化については、『FTL』にも言及がある。

> 本質を一般化する仕方に根本的な違いがあることが判明する。その一方は、質料的アプリオリという意味で遂行される本質の一般化であり、他方は形式的アプリオリという意味で遂行されるものである（XVII, 220）。

このように、『危機』の数学化も『FTL』の形式化も、理念化という同じ働きであり、概念史上で同じ起源を有している。そのため、それが引き起こす問題もまた同じである。

> 形式化する一般化の場合には各個物があるもの一般へ空虚化されねばならない（XVII, 220）。

先程、論理学による判断の形式化について説明した。それは、「トマトは赤い」といった事象的な事柄を含む判断を、「S は P である」という形式へ置き換えることであった。この「S」や「P」は、何か具体的な内容を持っているわけではなく、単に「あるもの一般（Etwas-überhaupt）」という空虚な記号でしかない。「S は P である」という形式になった時点で、この判断がトマトの

[7] Moran, D., *Husserl's crisis of the european sciences and transcendental phenomenology, an introduction*, Cambridge university press, 2012, p. 69.

色についての判断であったことは抜け落ちるのである[8]。

もちろん物理学と形式論理学は異なる学問分野であるため、「生活世界への道」と「形式論理学からの道」の間には、その差異から生じる違いはあるかもしれないが、以上の考察を踏まえると、フッサールは根本的には、『危機』においても『FTL』にも、同じ問題に取り組んでいたと考えられるのではないだろうか。そのため、この2つの還元の道は、その基本的な発想が同じになったのである。

おわりに

本稿では、従来、それぞれ異なる道であるとされてきた「生活世界への道」と「形式論理学からの道」が、実際には、〈理念化による意味の空洞化という問題に対処するために、判断や公式をそれが対応する個別的事物へと還元する〉という同じ発想から構想されていたことを示した。第1節では、自然科学の公式の意味の問題から、「生活世界への道」の内容を概観した。第2節では、『危機』以前のテキストを取り上げ、そこで展開される物理学記述を手掛かりに、「生活世界への道」に、生活世界内の個別的事物への帰還という側面があることを明らかにした。この解明によって、『危機』と『FTL』を結び接点が獲得できたので、第3節では、『FTL』における「個物への還元」を概観した後、「生活世界への道」と「形式論理学からの道」のそれぞれが出発点とする物理学と論理学が「理念化」という同じ働きをしていることから、この2つの道の関連性を明らかにした。

「はじめに」で確認したように、『危機』第3部Aで提示された、生活世界から出発して超越論的現象学へ至る道は、「生活世界への道」と「生活世界からの道」の二段階である。フッサールにとっても他の現象学者にとっても、最も大切なことは超越論的現象学へ到達することであるから、「生活世界からの道」に研究者の関心が集中することは当然のことである。この関心から見れば、「生活世界への道」は小道に見えるだろう。しかしながら、この小道を通らなければ、「生活世界からの道」という大通りに出られないことを考えれば、この小道の研究も決して無駄ではない。それによって、『危機』から『FTL』へと遡ることができたので、今後は、「生活世界からの道」と「形式論理学からの道」の違いを考慮しつつ、『FTL』から『危機』への道筋を探り、フッサールが「生活世界からの道」をどのように形成していったのかを明らかにすることを課題としたい。

（やまぐちこうたろう　岸和田市看護専門学校非常勤講師）

[8] 形式化が「トマト」を「S」という記号にするのに対して、類的普遍化は「トマト」を「野菜」といった類にする。形式化と類的普遍化の大きな違いは、形式には、そこに入る事柄を指示するような内容が一切含まれていないが、類にはそれがあるという点にある。「S」という形式には、「トマト」でも「ソクラテス」でも「日本」でも代入できるが、「野菜」という類に、「ソクラテス」や「日本」は入れられない。形式は、そこに代入可能なものを規定しないのである。この無規定性を、フッサールは「あるもの一般」と表した。

Vom Beziehung zwischen *Krisis* und *FTL*

Kotaro YAMAGUCHI

Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendentale Phänomenologie (Krisis), Edmund Husserls letztes, unvollendetes Werk. Dieses Buch wurde bisher in Verbindung mit anderen Büchern, z.B. *IdeenI* usw., unterschiedlich studiert. Die Beziehung zu *Formale und transzendentale Logik (FTL)* ist aber noch nicht geklärt. Daher klärt der vorliegende Aufsatz diese Beziehung.

In *Krisis* zeigt Husserl der Weg in die Transzendentale Phänomenologie in der Rückfrage von der vorgegebenen Lebenswelt aus. Nach *Erfahrung und Urteil* ist dieser Weg in “den Weg vom Lebenswelt” und “den Weg zum Lebenswelt” unterteilt. Der Letzte fährt von Wissenschaft ab und kommt in Lebenswelt an. Andererseits ziegt er in *FTL* der Weg in die Transzendentale Logik von Formale Logik. “Der Weg zum Lebenswelt” und “der Weg vom Formale Logik” haben insofern gemeinsam, als sie von Wissenschaft anfangen.

Er stellt das Problem von Entleerung des Sinn auf diese Wissenschaft vor. Dieses Problem ist das Problem, dass der Sinn von Formeln und Urteilen durch die Formalisierung von Formeln und Urteilen entleert wird. Durch Betrachtung dieses Problems klärt der vorliegende Aufsatz Beziehung zu “Der Weg zum Lebenswelt” und “der Weg vom Formale Logik”

「キーワード」
現象学的還元、生活世界への道、物理学、形式論理学からの道、個物への還元